



スケジュール

8:00-9:00	バス移動 (橋本駅-青根)
9:00-12:00	津久井青根フィールドワーク (水源地、青根集落、禅寺めぐり)
12:00-13:00	昼食 (青根小学校) ※昔ながらの青根手打ちうどん
13:00-16:00	里山散策路づくり (散策路、ベンチ、階段づくり) 【雨天】津久井の森林と林業のはなし 散策路の樹名板づくり
16:00-17:00	バス移動 (青根-橋本駅)

実施日時

平成22年10月3日 (日)

午前 8:00 橋本駅南口集合 / 午後 5:00 橋本駅南口解散

場所

津久井青根地区
青根小学校
青根小学校の学校林

講師

佐藤 好延 氏 (有限会社サトウ草木 代表取締役)
有限会社サトウ草木スタッフの皆さん

【主催】相模原市 / 株さがみはら産業創造センター / 一般社団法人相模原・町田大学地域コンソーシアム

【企画・運営】有限会社サトウ草木

【協力】青根小学校 / 青根地域の住民の皆さん / 財団法人相模原市産業振興財団

津久井 森林体験 教室2010

津久井青根の
フィールドワークと
里山散策路づくり

TSUKUI FOREST TOUR IN AONE

のしおり

津久井 森林体験教室 に込める思い。

相模原市緑区にある青根は相模原市の最西端に位置する里山風景の残る自然豊かな場所です。相模原市内外の水源地を護る私たちの生活の基盤を支えるために無くてはならない重要な場所です。

「津久井森林体験教室(当初は津久井森林教室)」は、平成12年(2000)に林業を営む(有)サトウ草木のスタッフの皆さんの手により始められました。

その根源には、衰退する林業、ひいては衰退

してしまった水源林の再生の必要性を里山の現状を通して肌で感じて貰い山を整備することの意味や大切さを感じて貰いたい、という強い思いがあります。

その信念から始まった青根での森林体験は過去にはバリアフリーの視点も取り入れた車いすでの移動も可能な遊歩道、山の整備で発生した間伐材を利用した椅子や階段の作りの環境を整える活動が行われてきました。整備された区画は光が射し、子供たちの遊び場として心

地よい森林浴の場として、地元内外の人々の憩いの場になっています。水源林という資源としてだけではなく、人間が本来求めている自然との関係が青根では築かれているのです。

最後に、森林整備には継続的な活動が必要不可欠です。そのため、後継者の育成が滞れば、せっかく整備した水源林もまた元の荒廃林に戻ってしまいます。また青根は県で唯一、準限界集落と認定され、若い世代の後継者を求める声が高まってきています。

青根マップ



さがみはらの水資源を護る「水源林」

水源林は「緑のダム」「天然の浄水場」とも言われ、私たちが毎日使う生活用水を安定的に確保するためには欠かせない存在です。

水源林の豊かな土地には水源かん養（雨水を蓄え、地下水として蓄える）、土壌による天然のろ過作用、草木の根が土壌侵食の軽減といった作用があります。

森林には人の手が入られていない「自然林」と、木材の生産などを目的として植林された「人工林」があります。日本は世界でも有数の森林資源保有国ですが、その約4割が人工林と言われています。しかし日本では第一次産業が収縮の一途をたどるにつれて、林業に携わる人々も少なくなり、やがて荒廃の進む森林が多くなってしまおうという事態に至ってしまいました。

私たちの生活基盤を支える水源林には継続的な整備が必要不可欠です。短絡的な商業目的のために、かけがえのない森林資源が侵されることは森林が人間の生命をも守ってくれる神秘の力を人間の手で封じてしまうことになってしまいます。青根では南サトウ草木のスタッフの皆さん、そして地域ボランティアの人たちの手により整備が行われています。

県内唯一の木造校舎「青根小学校」

青根小学校は明治6年(1873)に創立されました。いまでは珍しい木造校舎は昭和16年(1941)に起こった火災により焼失したものを地元住民の全面的な協力により再建したものです。趣ある佇まいは、テレビドラマの舞台としても利用されました。

学校経営のビジョンは「地域とともに生きる学校」とし、「明るく元気な子、思いやりのある子、粘り強い子」の育成に力を注がれています。

学校が所有する学校林では「上下流域小学校交流体験教室(都市部と水源部の小学生同士の交流授業)」「シイタケ栽培」など、自然環境学習を实地で学べるプログラムが行われ内外へのPRは青根の地域活性にも繋がっています。

これらの活動は地域の人々との連携で行われており、「人間関係力」を育む場にもなっています。

地域の活力を生み出す「新学校林育成事業」

学校林とは、学校が所有する森林を指します。日本に広まったきっかけは米国の教育家ノースロップ博士が紹介した「Arbor Day(植樹の日)」、実際に木を植えることにより青少年たちにより深い自然環境に関する見識と興味を持って貰うこと、地域社会への貢献を通じた愛郷の念を持つこと、社会へ出る前の奉仕活動の場を提供するという目的があります。現在その環(わ)は、大人たちの自然環境を改め、深める場にもなっています。青根小学校の学校林は南サトウ草木のスタッフの皆さん、地域ボランティアの方々に支えられ継続的な森林の整備・維持が現在も行われています。

今なお残る、戦争の痕「監視哨(かんししょう)」跡

正式名称は「厚木監視隊青根監視哨」。太平洋戦争中に敵機の襲来を目視で確認するために設置されました。徴兵前の若い学生たちが哨兵として重い緊張のなか、夜間も通した厳しい24時間体制の監視を強いられていました。

現在、監視哨母屋は壊されぼっかりと空いた穴のみ青根小学校裏山山頂で見ることが出来ます。戦争を繰り返してはならないという戒めとして、後世へ語り継がれるべき青根の大事な遺産です。

4 水源林

3 青根簡易水道浄水場

市立青根中学校

市立青根 児童保育園 消防署

諏訪神社(青根の大杉)

金谷山 長昌寺

市立青根小学校

相模原市 緑区役所出張所

小学校 学校林

7 監視哨跡

青根公民館

駐在所

青根の歴史を支える「長昌寺(ちょうしょうじ)」

正式名称「金谷山長昌寺」、臨済宗(遠溪派)の流れを組んでいます。かつて青根には3つの寺院がありました。長昌寺はその中で平丸という地域にありましたが、明治初期に本殿が焼け落ち、その後同村内で永らく無住だった上野田の泉福寺に場所を移し号を長昌寺と改め今に至ります。

昔から林業、農業中心に生活をしてきた青根では病氣や怪我は死活問題だったのでしょう。祀られている本尊は薬師如来、医王と称される医薬の仏様です。左手に薬壺を持ち、昼夜問わず全方位の病に苦しむ人々を癒し護ると伝えられています。

神奈川新聞 2010年8月21日 神奈川新聞社 24461号掲載記事

1942年ごろに撮影された監視哨と哨員の写真



旧津久井町役場に残された資料によると、この監視哨の正式名称は「厚木監視隊青根監視哨」。太平洋戦争中、本土防衛のために目視で敵機を監視する施設として、同様の監視哨が全国各地に造られた。穴や建物の中に人が隠れて空を監視し、敵機が襲来すれば、編成数や飛行方向、高度などを本部に伝えた。

青根地区で監視哨跡が残るのは、市立青根小学校の裏山。山頂に直径約3m、深さ約60cmの穴が残る。1941(昭和16)年ごろ、木造2層建ての監視哨が建てられたという。

裏山のふもとに住む無職井上明光さん(87)と同長田博さん(86)は、哨員として働いた経験を持つ。勤務したのは当時、近くに住んでいた10代後半の若者。数人一組となり、24時間交代で監視した。井上さんは「眠い目をこすりながら、開けでも目を凝らした」と振り返る。敵機を発見した場合は、上司を通じて、厚木にあった本部に電話で報告することになっていた。

米軍機は富士山を目標に日本に飛来。富士山手前で東に方向転換し、東京各地を襲撃したとされる。富士山と東京の間に位置する旧津久井郡は、帝都防衛の要一と考えられたという。長田さんは「例えば「エンジン」が四つならばB29などと、航空機の形やエンジン音を覚えさせられた。自分が襲来を見送るとは、被害が大きくなる。緊張しながら見張っていた」と語る。

約半年から1年、監視哨で勤務後、2人とも徴兵され、終戦を迎えた。裏山に残された監視哨はいつの間にか壊され、資料も散逸。戦後65年がたち、現存する哨員名簿に名前が残る人も、多くが記憶から忘れ去られる中、井上さんは「静かな集落の人々の生活も巻き込んだ戦争は、もう二度と起きてほしくない。監視哨跡を通じて、自由や青春もない時代があったことを多くの人に知ってほしい」と願っている。

戦後65年の夏

相模原・青根地区「監視哨」跡

山あいの静かな集落にも、戦争のつめ跡が残っていた。太平洋戦争中、米軍機の空襲を監視した「監視哨」跡が、相模原市緑区青根にある。監視を任されたのは当時、15歳前後から徴兵前の少年たち。昼夜を問わず、24時間態勢で働いた。青春期を、戦争のため過酷な体験を強いられた元哨員たちは、監視哨跡を通じて、不戦の誓いを後世に伝えたいと話している。(川口 肇)

少年哨員が24時間空襲警戒 青春なく誓う不戦



監視哨跡(左)が残る山頂に立つ井上さんと長田さん(右) 相模原市緑区青根